



ぶどうの里 古都

古都の地は岡山平野の東端にあるがこの平野は瀬戸内海に面し瀬戸内海気候と言われ昔から温暖少雨で、この平野の周辺の起伏の緩やかな山々には、木の実・果実も多く、今日の古都の村々には先祖が弥生時代から住み着くようになったと考えられています。

古都の位置は東経134度0分14秒、北緯34度42分で東西5.4キロ、南北5.7キロ、面積10.781平方キロで全面積の約3分の2は山地である。また、現在の世帯数は2,188世帯、人口5,109名(男性2,466名、女性2,663名。平成25年5月現在)で果樹園・米作を中心とした専業農家と兼業農家が混在し、その他サラリーマン世帯が多く見られる地域として発展しています。

古都村は備前国上道郡居都郷の後身の地である。当時の西隣は同郡上道郷で其の処に備前の国府があった。従って居都郷と共に、古代に於ける備前国の経済の中心地であったとみられる。山王山古墳を初め古墳も多いが、田・野には上代寺院址や条里制(四坪、五坪、六坪という名が残っている。)の遺跡もある。中世に於いては居都庄と呼ばれ皇室領になっており公卿の「山科家」が領家職を保有していた。

しかし、地頭や其の垂流武士の勢力が次第に強くなって、戦国時代には此の地方の土豪たちの争奪の場となったようである。城址(内山城:南方、藤井城、宍甘城の三つがあった)が多く残っているものそのためであるが、備前国の安国寺(1,350年建立)が此処に造られたことを以てみれば新しい武家文化にも早く移植せられたに違いない。

中世以降は古都に東から西に山陽道が通過することとなった。近世の居都は藤井に宿駅が設けられて本陣を初め旅籠屋が立ち並び交通の要所として繁昌し著しいものがあつた。

明治以降の古都は最早宿駅ではなく平凡な一農村と化した。山野が盛んに開拓されて果物王国を誇る岡山県の中でもぶどうの産地として、遠近にその名を馳せ今日に至つた。

本村がぶどうの産地として世間に高く評価され、本州はもとより遠く北海道、九州に販路を有し大戦前までは台湾、韓国にまで進出し「古都の葡萄か、葡萄の古都か」と推奨するまでに至つたのは、決して偶然ではない。果樹栽培を取り入れた先覚者が幾多の失敗や難関を突破し、後輩も亦よく先輩の指導に従い、協力を惜しまなかつた結果に外ならないのである。瀬戸内海の温暖な気候と肥沃な土地は果樹の成育に適して以前から柿が植えられていた。その後営利栽培として明治31年梨30本を植えたのが最初であり、明治32年には梨、桃を植えてから多くの人々が植えるようになった。

露地葡萄は明治38年にキャンベル、レディ・ワシントン、ナイヤガラ、ルイジアナ、カトウバ等を植えたが台木を使う事を知られていなかったので、数年で駄目になった。思考錯誤の結果大正8年になって葡萄に台木というものが有るのを聞いてキャンベル苗を導入して栽培し成功に至った。温室葡萄は大正8年に30坪の温室を造った。幅3間、奥行き10間で煉瓦で囲み中をを三尺に深堀した土と共に馬糞と紡績屑を入れて、マスカット・オブ・アレキサンドリアという温室葡萄を栽培し東京の「山長」と神戸に生産品を送った。栽培の成功により販売をいかにして行くかに苦勞した。大正15年7月24日古都小学校において会を開き㊦果物出荷組合を組織し「遠藤春太郎」氏が組合長に就任し数名の理事を決め販売方面を各理事が担当した。この会で葡萄の共同出荷に手を染めた。

昭和3年には北海道に販路拡大を求め列車で2等客車に貨物を1両連結して現在の東岡山駅から輸送することに大阪鉄道局と合意が出来たことにより大幅に拡張出来た。しかし、浜口内閣になって緊縮政策の影響を受け世の中が不景気になってきた。そこで昭和9年8月には㊦の葡萄を京城、平壤に輸送することに成功した。一方台湾にも送り至る所で好評を得た。

戦中・戦後の混乱期を経て葡萄の栽培は初めて水田で行われたが、結局山の傾斜地が一番適していた。昭和28年初頭には古都村で総戸数485戸、農家戸数380戸で果樹栽培戸数230戸(約6割)でキャンベルとデラウェア、甲州葡萄、温室葡萄が主で当村においては、果樹と言えは葡萄、葡萄といえはキャンベルと露地葡萄のキャンベルに統一された。これもこの地が年間雨量、備前の夕凧によって、示される瀬戸内海の気温調節の作用もあり又土質・日照時間に恵まれ敵地適作とされた。従ってその他の果物(梨、りんご、桃、柿、密柑、枇杷)等は不適とされ減少していった。

昭和30年代に入ってデラウェアの種なしに成功、引き続きマスカット、ベリーA、ネオマスカットが導入された。同時に昭和33年には大規模栽培として、鉄地区に10ヘクタールものマスカット、ベリーAの団地が造成され本格的な葡萄栽培が行われだした。又全国に先がけてビニールハウスを利用した栽培も行われ早期出荷が可能となった。デラウェアは日本一早い4月上旬の出荷となり高付加価値のデラウェアが出荷された。昭和56年に岡山県農業試験場においてピオーネの種なし化に成功し一気にキャンベルから種なしピオーネをニューピオーネの名前で特産物として栽培に取り組んだ。昭和57年には古都宿地区に10名で15アールのピオーネ団地を造り本格的なニューピオーネの一大産地として栄えた。

平成8年には㊦園芸協会からJA西大寺葡萄部会古都支部に改組された。この時期が古都の葡萄も最盛期であった。

平成12年にはJA岡山西大寺葡萄部会古都支部となり組合員120戸栽培面積40ヘク

タールとなった。

このころから葡萄農家の高齢化が始まり後継者不足に直面し次第に減少しつつある。

しかし、同時にニューピーネの栽培だけでなく、ポスト次世代の葡萄として紫苑、オーロラブラック、シャインマスカット、瀬戸ジャイアンツ等の高付加価値で魅力ある品種に変更して行き、より高品質の葡萄栽培に全力で挑んでいく。これが伝統ある古都の葡萄づくりの魂です。

これからもこの意気地を忘れることなく先人に学びあくなき挑戦が始まる。

平成25年8月24日

【ぶどうの里】古都ふれあい祭り実行委員会
(古都村史から引用)